釣れ釣れなるままに

１９９６年思い出の釣行記 PART.　６

幌島の超大物
アブラコとの大格闘

鹿島釣狂

釣遊会第７回大会

☆開 催 日	平成８年１１月７日			
☆開催場所	井寒台～冬島			
☆入釣場所	幌島			
☆潮	干潮	００：５３	２４㎝	
	満潮	０８：３９	１１５㎝	
☆釣　　果	カジカ	４２８	㎜	４
	ハゴトコ	２８０	㎜	１
	重量	３１１	０ｇ	
☆成　　績	合計点数	１０１９	点	
	成績	４	位	

親の死に目に

　妻の母親が胃の手術を前日にした。妻は寝ずの看病などで忙しく立ち振る舞っている。こんな大変な時に妻を振り切っての例会参加である。祖母の窮地を心配し、久し振りに帰ってきた息子も呆れ顔である。あげくに部活のバスケットに疲れぎみの娘が熱を出した。「たまの休みで、それしか能のない親父なんだから、行けば～。」の息子の言葉が胸に痛い。

熱で潤んだ娘の瞳が胸に突き刺さる。そして何より、釣りに行く準備を始めた私に向けられる妻の視線が厳しい。ずっーと無言でいるのが益々心苦しさを募らせる。妻の「・・・」は自分でもそう思う。本当にどうしようもない己のサガである。こんな時に例えが悪いが「釣狂はその己の趣味のために親の死に目にも会えない」との言葉をよく耳にするが、私もそれに当てはまる気配が漂っている。

職場の１年の成果が試される大きな行事も２７日に控えている。その行事のために毎日夜遅くまで残業した。だが、まだ仕事は残っている。それを振り切っての例会参加である。

過去の実績は？

この区間では鵜苫沢とエンルム岬に１度ずつ入釣したことがある。鵜苫沢は、釣遊会に入会する前に、臨時で参加させていただいた所である。釣遊会の皆さんは、太平洋での釣りも、釣大会への参加も初めてで不安一杯な私を本当に温かく迎えてくれた。これといってとくに入釣する場所も決めていない私を見かねてか、前野氏が親切にここ鵜苫沢に案内してくれた。しかも、胴付仕掛けしか持っていない私に、見たこともない珍しい仕掛けを譲ってくれた。素晴らしい釣果をあげた前野氏に比べて、たいした釣果も無かった私だが、これが釣遊会に入ったきっかけである。

エンルム岬は、釣遊会に入った私が初の身長優勝をした所である。この時は、激しい西風と高波で他に入るところがなく仕方なく様似港に入った。港の中ではまったく釣れず、エンルム岬の裏に回ると西風が岬に遮られて風もなく波も比較的穏やかであった。そこから当日の身長優勝となったアブラコ（写真）を抜き上げたのである。

ジンクスをかつぐ？

年間優勝者は誰がどう足掻いても嵐氏に決定している。その意味では私たち外野席は若干面白みのない大会であるが２位以下は団子状態で続いている。私はといえば５回と６回は大コケをしたが１～４回までの貯金があるのでなんとか年間１０位を保持している。今回の大会の成績如何では上位に頭を突っ込めそうでもある。

今回の入釣場所は幌島と決めてある。誰が何と言おうと幌島と決めてある。５，６回大会は１度入釣したことのある無難な場所を選び大こけをした。１～４回は初めて入った場所でどれも好釣している。ジンクスを担ぐほうではないが、幌島は初めて入る場所なのである。

１０月の初めに北海道に大雪が降り、本年も昨年の大雪に引き続き嫌な予感がする。ここ夕張鹿島は１１月１３日～１６日まで寒波が押し寄せ、路面は凍てつきシユーパロ湖にも蓮の葉氷が浮き始めた。当日の天気予報では日高沿岸に低気圧が近づき、風強く、波も３～４ｍとある。

天気予報がどうであろうと幌島と決めてある。幌島は沖根があり、多少の波も消してくれるとのことである。幸いにも天気予報とは裏腹に井寒台で海を見ると風もなく波も穏や

かであった。

思いは幌島の大カジカ

バスは幌島に近付いた。清田氏も一緒に降りるとのことである。これは有り難い。今日は清田氏に教えを請おう。しかし、降りたところは幌島を通り越し白泉バス停であった。清田氏は「せっかく降ろしてもらったのだから、ここで釣る」と言う。何と幅の広い人であろう。私には白泉の知識がまったくない。「入釣場所は幌島」と決めたときから『北海道のつり』のバックナンバーを１０年ぐらいに遡って幌島のみを調べておいた。

清田氏と別れて、一目散に幌島バス停に向かって歩き始める。思いのほか距離はなかった。白泉は点々とギョギョライトが光っていたが幌島ではたった１人のヘッドライトが見え隠れしているだけである。本命場所とするバス停前（A）はもちろんがら空きである。さっそく背中にバス停（これは、下りの時刻表だけのもので、上りに立派なバス停があるのが釣り場から上がっての帰りに分かる）を見ながら幌島の大カジカを夢見て３本の竿を振り込む。

アタリは少ない。２時半頃ようやくハゴトコの２８㎝があがる。３時ごろ１本針にカツオをつけて遠投しておいた芋に大きなアタリ。大口を開け、えらをいっぱいに広げてカジカ４２．８㎝があがる。これで２魚種が揃った。

幻の超大物

同じ所に振り込む。すぐに大きなアタリで道糸がピーンと張る。ダイダイグイーンと竿を引っ張る。大きく合わせるがガチッと根掛かり。はずれそうにもない。テグスをダラリと弛めて暫くそのままにしておく。またまたグングンと引っ張る。大きく煽る。少し寄ったかに思えたがやはりガチッとしてはずれない。同じ事を何度か繰り返すが根掛かりはいっこうにはずれない。魚もかなり大物なのかいっこうに弱らずグイグイッ、グ、グ、グイーンとくる。この引きからすると今までに見たことも無い大物アブラコなのであろう。仕掛けの手前の道糸の部分が岩と岩の間にスッポリ挟まっているものだろう。その隙間はかなり大きいはずだがそれを上回る大物のアブラコの頭が潜り抜けれないでいるのであろう。なんとか根掛かりがはずれてくれることを念じながら道糸をさらに強く引っ張る。ブチッとした手への感触の後、スーツと軽くなった。無念。暫く放心状態が続く。

入釣場所の間違えが・・・

清田氏が白泉からやって来た。白泉ではさっぱりであったとのこと。私の右に入る。（後から思えばここが立派な幌泉バス停前の本命場所である）すぐに、カジカの５０㎝近い物をあげて、どうだと言わんばかりに高々と持ち上げる。エサは？と見るとプックリした蛍イカでキャップライトの光りに当たり迷彩色の光を放っている。そのまま生で食べても良さそうである。私の目がいかにも物欲しげに見えたのか、清田氏はその鮮度の良い蛍イカを惜し気も無くどっさりくれた。

『さあ、食べよう』ではない。早速それをつけて遠投である。力強く竿を振ってもそのままの形で飛んでいく。まもなく、カジカが立て続けに３本上がる。これで２魚種５尾が揃った。空が白々と明けてきてアタリが遠のいたが締切り時間間際に、４０㎝のバッカンにジャストのカジカをあげる。「バス停前で駄目だったら」と狙いをつけていた旗場のボール前に入っていた人はハゴトコのみの釣果とのことである。

悔やまれる幻のアブラコ

周りのごみを丁寧に拾い、釣道具もすっかり片付け、清田氏とともに幌島バス停に戻る。様似の方から釣遊会の旗を前面にかかげたバスがやって来た。バスに乗り込む時にはいつも大前事務局長が箒で砂を払ってくれる。苦労をかけまいと乗り込む前に丁寧に払っていたつもりなのだが、さらに念入りに払ってくれる。いつものことながら頭が下がる。

幻のアブラコのことを悔やみながら無口でバスに乗り込んだ。堀氏から早速、声がかかる。「なかなかいい釣りをしてきたんでしょう。あんたは成漬がよいとムッツリとしているんだから。」そんなことは意識していないのだが、そう言われてみると自分にも思い当たる節がある。

審査の結果、優勝は１１７９点の佐々木氏。準優勝は１１４０点の大前氏。３位に１０７５点の広田氏。（氏は私の中学校時代の恩師でありことのほか嬉しい。乳飲川に入っての釣果とのこと）　身長優勝は４６．５㎝のカジカを釣った安曽氏であった。私は嫁さんがハゴトコとなり１０１９点で４位入賞となった。あの、幻の大アブラコを引き抜いていれば優勝確実だったとの思いが脳裏をよぎる。そして年間上位入賞も・・・。

チョウロウ会の田中氏が襟裏港でカンカイを２００匹ほど釣ってきた。型はちょうど食

べ頃の小ぶりのものだがバッカンから溢れようとしている。彼は、現在８３歳とのことであるが、畏怖堂々としている。５年程前までは皆さんと一緒に岩場の前に出てビュンビュンと竿を振っていたらしいのだが、近年は漁港に入ることが多くなってきたらしい。前年度は大会の度に海が荒れたので、１位・３位・４位と入賞している。５回大会には入船漁港に入り、黒がしらの４１．５㎝あげ、年間魚種別大物賞も獲得している。

チョウロウ会？

釣遊会には６０歳を越えた者がチョウロウ会を組織している。わたしの近所のお年寄りと比べると皆さん本当に若々しい。チョウロウ会はどのような漢字を当てるのだろう。

長老～ただ単なる「年老いた人」ではなく、「その方面（もちろん釣りの面）で経験を積んだ、頭立った人」

嘲弄～「あざけりなぶること」では決してない。

広辞苑で調べてみると「チョウロウ」に当てはまる漢字はこの二つしかない。思いつくまま当て字にしてみる。

朝労～釣りの面でも「朝」には強いが「労」とは感じていないだろう。

蝶狼～蝶のように軽やかに舞い、狼のように獲物を狙う。

潮郎～潮を読み取る若者たち。

頂楼～彼らは釣りの道では天にも届きそうな・・・。

澄朗～心が澄み渡っていて、朗らかである。そうかな～～。

挑浪～浪に挑んでいる。

超老～老いを感じさせない。

諜漏～諜報員のごとく釣情報を嗅ぎ出し、会員の皆さんには惜し気もなく情報を漏らしてくれる。

懲牢～時には牢屋にでも入れて「釣りすぎんな！」と懲らしめたいこともある。

聴聾～釣りを達観していて誰にも耳を傾けない。

なんだかだんだん怪しくなってきた。

ありがとうございました

年を明けた１月２５日に総会があったが、私は年間の６位にランクされた。点数は過去最高の３１点である。釣遊会の年間成績は７回の例会のうち上位５回の成績で競われる。１９９６年度は７回全ての例会に参加できたことと、大こけはあったが残りの５回にまあまあの成績が取れたことで年間入賞が可能になったと思われる。今までも何度か年間入賞のチャンスはあったのだが、満足に例会に参加できないで悔しい思いをしてきた。１９９４年度などは４回で２８点となったが残りの３回の例会に参加できなく残念な思いをした。今年度は身長優勝もできた事だし、めでたしめでたしの１年であった。総会の後の懇親会に飲んだ酒は妙に甘く、ほろほろと酔い潰れてしまった。

最後に、何時もながら懇切丁寧にご指導いただいた釣遊会の仲間たちと、拙い私の駄文に付き合って下さいました皆々様に深く感謝申し上げ、釣行記『釣れ釣れなるままに』を閉じさせていただきます。チョン。

年間成績

①	４／２１	鷹の巣岬	１００８	１０位
②	５／　５	豊浜平盤	１１０８	６位
③	６／１６	東歌別	１０３３	７位
④	７／１２	ルランベツ	９５２	４位
⑤	９／　８	オンコの沢	７２２	１９位
⑥	１０／２０	ルランベツ	３１７	２７位
⑦	１１／７	幌島	１０１９	４位

７回　７７÷７＝１１

５回　３１÷５＝６，２

７回平均　６１５６÷７＝８８０

５回平均　５１２０÷５＝１０２４